

幽圃平堂累歳成 芒鞋筠杖日經行
接花常見趁春晴 是中受用難窮盡 不學塵蹤擾利名
禽聲依竹自然樂 風吹過松無限清 種藥幾番逢雨歇

【読み】

幽圃（ゆうほ）平堂（へいどう）累歳（るいさい）にして成る 芒鞋（ぼうあい）筠杖（いんじょう）日に經行（けいこう）す。 **禽聲（きんせい）竹に依（よ）る自然の樂（がく）** 風吹いて松を過ぎ 限りなく清し 藥を種えて 幾番（いくばん）か雨に逢いて歇（や）み 花を接（つ）いで 常に見る春晴を趁うを 是（こ）の中（うち）に受用（じゅよう）して 窮尽（きゅうじん）し難（がた）く、塵蹤（じんしょう）にして利名を擾（みだ）すを学ばず。

【意味】

奥まった庭園に平らな建物、長年かけて造り上げたものだ。わらじを履き、竹の杖をついて、毎日このあたりをゆつくりと歩く。 **鳥のさえずりが竹にこだまして、自然が奏でる音楽のよう。風が松の間を吹き抜けて、どこまでも澄みわたるように清々しい。薬草を植えれば、何度も雨が降っては作業が中断し、花を接ぎ木すれば、たびたび春の晴れ間を見計らって作業する。この場所での楽しみや恩恵は尽きることがなく、名利をかき乱すような俗世間の生き方を、私は学ぼうとはしない。**

*幽圃…人里離れた静かな庭園 *平堂…平らな屋敷、または簡素な建物のこと。 *累歳…長年にわたって、数年を重ねて。
*芒鞋…芒（すすき）などで作った草鞋（わらじ） *筠杖…竹の杖 *経行…歩きまわる。散策する。 *幾番…何度も、何回も。
*趁…〜に乗じて行ふの意 *受用…楽しみ、心の満足、恩恵を受けること。 *窮盡…物事を極限まできわめ尽くすこと *塵蹤…俗世間の足跡、世俗の生活。

【出典】宴會成趣園詩 （高延年・金）『御訂全金詩増補中州集』卷六十二

宴會 成趣園の詩（えんかい せいしゆえんのし）

「成趣園」という名の園で宴会を催したときの詩」または「成趣園での宴会の情趣を詠んだ詩」